

聖書:第一列王記11章1～13節

説教:あなたの父ダビデに免じて

はじめに

ソロモンは十九歳という若さで父ダビデの亡き後、イスラエルの王座に就きます。経験もなければ後ろ盾になる者もいませんでした。大きな不安の中にあつたとき、神から知恵をいただくことになり、その知恵をもって彼は神殿を建てることに成功します。それをきっかけにしてイスラエルには金や高価な象牙や貴重品が次々と外国から入って来る。まるでバブルと思えるような繁栄ぶりです。こうなると周りの国々の見る目も変わってきます。かつてイスラエルを苦しめ、奴隷として働かせたこともあるエジプトでしたが、そのエジプトの王パロが自分の娘をソロモンの妻にと差し出してきました。あなたの国と同盟関係を結びましょうという意味です。パロでさえこうなのですから、まして他の小さな国々はこぞってソロモンを敵に回してはならぬということで、続々と娘を差し出してくる。それで3節に書かれているように、七百人の王妃としての妻と、三百人の側女を抱えるようになります。

1 主

1) 命じていた

このようにイスラエルの経済は右肩上がりて勢いに乗っています。海外からはソロモンの知恵を聞きたいと願って続々と外交使節団が訪れます。人の目にはすべてが順調に見えます。ところが神の目にはそう映っていません。大きな問題があると見えている。そのことが2節に書かれています。「この女たちは、主がかつてイスラエル人に、「あなたがたは彼らの中に入ってはならない。彼らをあなたがたの中に入れもいけない。さもないと、彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わせる」と言われた、その国々の者であつた。しかし、ソロモンは彼女たちを愛して離れなかつた。」

「主がかつてイスラエル人に言われた」とあります。調べると、申命記7章3節にあります。ソロモンのときからさかのぼることおよそ五百年前のモーセの時代です。ご存じのように、イスラエルの民たちはモーセに導かれてエジプトから脱出し、約束の地であるカナンを目指して荒野を旅していたときです。その旅の途上で神は、カナンの地に

住むようになったときのために細々とした注意を与えていた。そのうちの一つがこれでした。

ソロモンはこの命令を知らなかつたのか。知らないはずはありません。ユダヤ人はモーセの律法をいまでも徹底的に覚えさせられくらいです。ましてソロモンの記憶力は抜群です。当然知っている。知っていたのに、律法に反して外国人の女性たちを自分の妻にした。

2) 警告していた

そんなソロモンに対して神はどうしたか。9, 10節。「主が二度も彼に現れて、このことについて、他の神々に従っていつてはならないと命じておられた。」

私たちは、ほかの人が一度でも失敗やミスをする、と、「あの人は駄目だ」とすぐに決めつけてしまう傾向があります。ところが神は非常に忍耐強い。4節に「ソロモンが年をとったとき」とあります。ソロモンは四十年間、王の座にいましたから、単純に考えてもおよそ四十年弱、「ソロモンは駄目だ」と決めつけない。辛抱強く警告していたことになります。それでもソロモンはやめない。かえって妻たちが信じていた神々を拜んだり、いけにえを献げたりする。またあるときは、高きところをつくる。今でいえば山の上に祠のようなものをつくったということでしょうか。そういうことを次々としていく。

3) さばき

しかし神の忍耐は永遠に続くわけではありません。悪いことは悪いとして、かならずさばかなければならないときが来ます。ソロモンの場合もそうです。そこで神はこのように宣告します。11節。「あなたがたのこのようにふるまい、わたしが命じたわたしの契約と掟を守らなかつたので、わたしは王国をあなたから引き裂いて、あなたの家来に与える。」

本当にそうなつたのか。なりました。この後、ソロモンの側近であつたヤロブアムがソロモンを裏切って反乱を起こそうとします。この反乱は失敗に終わり、ヤロブアムはいったんエジプトに逃げる。ところが、ソロモンが死ぬと彼はイスラエルに戻り、不満分子を集めて自分が王となる。そのようにしてイスラエルは北と南に分裂してしていきます。神が言われたとおりになつたわけです。

## 2 ソロモン

### 1) かつての信仰

もともとソロモンの信仰はあやふやなものだったのか。むしろすばらしい信仰者だったと言ってよい。彼が神殿を建てたとき、人々に対してこうに語っていたのです。「あなたがたは、今日のように、私たちの神、主と心をつ一つにして、主の掟に歩み、主の命令を守らなければならないのです。」それは嘘ではなくてソロモンはそのとき心からそう思っていた。

### 2) やがて軽んじていく

そんな彼が、どんどん神の道を踏み外していきま。神から、世に並ぶ者がいないほどのすばらしい知恵をいただいた人が、どうしてこうも簡単に主を捨てていくのか、不思議に思います。あれだけ優秀な頭脳を持っているのならば、何が正しくて何が間違いなのか、判断できないはずはない。ところが彼はまったく神に立ち返ろうとするそぶりさえ見せません。

その理由について2節で説明されています。「ソロモンは彼女たちを愛して離れなかった。」中国の故事からとったことわざに、「傾城（けいせい）」ということばがあります。「絶世の美女に心奪われた王が政治をおろそかにしてしまい、やがて国が傾いていく。」そんな意味です。まさにソロモンにぴったりです。では女性が悪かったのか。確かにソロモンを誘惑し、ほかの神々を拝むように仕向けたのは女性のほうだったのかも知れない。しかし、神は誰の責任を問うのか。女性が悪いとは言っていない。ソロモンの責任だと言うのです。創世記でアダムとエバが罪を犯したときのことを思い起こします。食べてはならない木の実を最初に食べたのは妻の方でした。でも、神が最初に呼びかけた相手は誰であったか。夫です。「神である主は、人に呼びかけ、彼に言われた。「あなたはどこにいるのか。」」（創世記3章9節）神は、妻のかしらである夫に対して責任を問いかけた。ここでも同じです。この責任は誰にあるのか。ソロモンであるとはっきりと言われました。

## 3 救いの道

### 1) あなたの父ダビデに免じて

このようにソロモンに対するさばきは実に厳しい。でもよく見ると神は不思議なことも言われます。12節。「しかし、あなたの父ダビデに免じて、あなたが生きての間はそうしない。あなたの子の

手から、それを引き裂く。」ソロモンが死んだ後にイスラエルを継いだのは彼の息子レハブアムという人でした。でも彼はどうも王の職責を耐えられるような器ではなかった。何を決めるのにも自信がない。人の意見に頼って間違った判断をしてしまい、民たちから信用されなくなる。そのことがあて、さきほどのヤロブアムが北イスラエルの王となっていくわけです。

罪を犯したのはソロモンです。本来ならソロモンがすべてのさばきを受けるべきでしょう。ところがソロモンは何もさばかれず、穏やかに死んでいく。父ダビデに免じてソロモンをさばかず、その代わりにソロモンの息子がひどい目にあう。これは不公平ではないのか、おそらく多くの方は思うでしょう。

### 2) イエス・キリストに免じて

どう考えても理屈に合わない。しかしよく考えると、このことが私たちにとって実は大変な恵みでした。

反対のケースを考えてみればよい。神が、「ダビデに免じてあなたをさばかない」と言わなかった、そう考えてみましょう。罪の責任はソロモンにありますから、ソロモンがさばきを受ける。なんの問題ありません。神は義なる方ですから、正しくさばいてくださった。非常にわかりやすい。そのとおりです。

しかし、もしそこで終わったとしたら何が起きるか。自分のことを振り返ってみましょう。私たちは、「ソロモンはひどい王さまだった」と言えるのか。神の掟を守ってきたと胸を張って言えるのか。自分のやってきたことを思いだしたら恥ずかしくてとても神の前にも出られない。それが私たちです。そうするとどうなりますか。今すぐ神からさばかれても文句は言えないわけですね。「神さまは何と無慈悲で恐ろしい方なのか」と文句を言える筋合いではない。これが私たちの本来の立場です。

それなのに私たちはここに座っている。神の前に出て神を礼拝している。なぜこんなことができるのか。当たり前だと思っていたかもしれませんが、よく考えましょう。父なる神がこのように語ってくださったからではないですか。「ダビデの子孫として罪の世に降った神のひとり子、イエス・キリストの十字架に免じて、わたしはあなたの罪をもうさばかない。」

こう言ってくれたので、私たちは安心して神の前に出られる。どんな罪でもその罪を十字架の前に出せば、すべて赦していただけるという約束をもらっ

ているので、今日ここに座ってられる。神は不公平だと言う前に、不公平と思えるほどの恵みをこちらがいただいていたのです。

ひとまず安心しました。でも問題がまだ一つ残っています。ソロモンはダビデに免じてさばきを免れたのに、ソロモンの息子が代わってさばきを受けました。私たちにもこれと同じことが起こるのか。自分の罪は赦された。それはいい。でもその代わりに息子や娘たち、子孫たちにさばきが及ぶのか。もしそうだとするなら、安心してられない。子どもやお孫さんのことが心配になる。

結論から言いましょう。それも大丈夫です。ダビデは人間でした。ですから限界がありました。ダビデに免じてさばきを免れることができたのはソロモンだけ。その代わりソロモンの子どもがさばきをうけることになりました。

でも、イエス・キリストは神の子です。神の子が十字架におかかりになって私たち受けるべき罪のさばきを完全に受けられたのです。そのイエスに免じて、と言われたら、どれくらい免じることになるか。ダビデの場合とはまったく違います。イエスが与えてくださる罪の赦しは完全です。完全ですから、私が犯した罪のさばきを息子娘たち、孫たち、子孫たちが負うことは絶対にならない。ですから私たちは安心して座ることができる。

そのような恵みの中に、私たちは置かれているということを思い起こしたいと願います。